Bayerische
Staatsbibliothek
München

享保四年甲子孟春

三條通寺町東へ入

吉田新兵衛

白壬都書林

寺町通二條下ル町

鉛屋安兵衛

古
先
妻
亡
而
数
月
乃
喪
主
一
歓
会
諸
親
友
以
一
盃
奠
之
其
人
来
吊
者
亦
皆
如
之
一
日
有
多
人
像
妻
之
容
者
来
太
為
歓
抃
之
余
亦
為
之
感
泣
云

茶牕閒話二事

○信濃（シナノ）の国（クニ）長門（ナガト）なる、傍（カタハラ）に、長（ナガ）二の時（トキ）分（ブン）、弁当（ベントウ）とりよせたるものなり。安土（アヅチ）桃山（モヽヤマ）の頃（コロ）、信（シン）長公（チヤウコウ）、茶（チヤ）の湯（ユ）御（ゴ）執心（シフシン）ありしとぞ。挿竹（ハサミダケ）の花（ハナ）とりよせ、自（ミヅカ）ら切（キ）りなどして、数寄（スキ）の道具（ドウグ）のさまとせられしとぞ。挿箱（ハサミバコ）ハ大坂（オホサカ）の陣（ジン）の時（トキ）出来（デキ）て、雑兵（ザツピヤウ）の荷（ニ）ふものなり。安土（アヅチ）桃山（モヽヤマ）の頃（コロ）、信（シン）長公（チヤウコウ）、茶（チヤ）の湯（ユ）御（ゴ）執心（シフシン）ありしとぞ。挿竹（ハサミダケ）の花（ハナ）とりよせ、自（ミヅカ）ら切（キ）りなどして、数寄（スキ）の道具（ドウグ）のさまとせられしとぞ。挿箱（ハサミバコ）ハ大坂（オホサカ）の陣（ジン）の時（トキ）出来（デキ）て、雑兵（ザツピヤウ）の荷（ニ）ふものなり。安土（アヅチ）桃山（モヽヤマ）の頃（コロ）、信（シン）長公（チヤウコウ）、茶（チヤ）の湯（ユ）御（ゴ）執心（シフシン）ありしとぞ。挿竹（ハサミダケ）の花（ハナ）とりよせ、自（ミヅカ）ら切（キ）りなどして、数寄（スキ）の道具（ドウグ）のさまとせられしとぞ。挿箱（ハサミバコ）ハ大坂（オホサカ）の陣（ジン）の時（トキ）出来（デキ）て、雑兵（ザツピヤウ）の荷（ニ）ふものなり。

バ婆ア。爺ヲ人ガシ往(ヤ)ク事ナラ。手伝ハ爺ノ大(ヅ)キ岡(ヅ)ヲシテ。コヨ形(カタチ)ヲ摸(モ)シテ木(カ)ヲ作ルト。ソレ婆(バッ)ハ笑(ヰ)ヨ爺ヲ。ソレヲ法(ハフ)ヲ木(カ)ヲ彫(ホ)ルト。ソレ婆ハ笑ヨ爺ヲ。ソレヲ法ヲ木ヲ彫

ま言ふを。(ダイヒヤウ)
を。而して(シカウ)
前より引合(ノチ)
侍成(ブン)て。(ダイ)
の文
山より(ヨリ)
乱(ラン)れ舞(マフ)
○(ツヅ)
家宛の

を上(ジヤウ)ざの壁(カベ)を押(オ)
後を眠(ネム)
切て。(メン)〳〵乃
冊(サツ)を。(ヒツカ)筆架(ミヅ)水滴(イレ)等。美(シウ)を尽(グワ)
て。面〳〵の供(ヒヤウ)
机(ヒヤウ)の衆(シユウ)同(ドウ)〳〵そこ
ほ。浄(ジヤウ)
〳〵して。(ザノミシナカ)座心
て石山(ヤマ)より一人で
出(イデ)〳〵吟(ギン)で。(セイ)
おの〳〵詩(シノコト)事(ヲリ)畢(ヲヘ)て。(ダイ)大
饗(キヤウ)あり。(シユエン)酒宴
(ユキ)自筆(ヒツ)の立(トサ)
蓮華(レンゲ)王院(ワウイン)の什(ジフモツ)
物(モツ)
て。加賀(カザウ)の
宮(ウツ)
的(ゲキテキ)
筆力(ヒツリヨク)
て。来(スエ)
を(エフ)

會せ
よ。と(イザ)あり。連(ゼン)句のハ百句(ミツ)滿つ事もよまで。ゐて
連歌
○
連歌師の次第　昌休　紹巴
昌叫(紹巴弟子)　昌程
元珠(昌休弟子)　元紹(昌叫塔頭)　元的
○五山(ゴサン)の大侍會(オホレクワイ)を經(タンザ)冊切(サツノギリ)と稱(シヨウ)ど。南禪寺(ナンゼンジ)傳(デンウラウ)主の
時。短冊(タンザク)切(キリ)の事あり。龍山(リヨウザンニ)賞雪(シヤウスキヨ)と云(イヒ)て。侍を伍(クミ)
切の式(シキ)あり。今の式(シキ)は。公山の長老及(オヨビ)西堂(サイダウ)なり。出世の人各
相紹(カユ)手(テ)を經(タテ)て。侍(ジ)を請(ウケ)。而(シカウ)して頭(ヅ)衍(ヒヤウ)と云事あり。宗祇
卷一ツを書(カキ)て。一座を互(タガヒ)に回(マハ)し。志(こゝろざし)ある句(ク)を

黄金百枚(デウ)を投(ナゲ)もて、或(アル)侍の
へ人とのぞみもとめ、折(ヲリフシ)ふし金
とらす。今井(イマヰ)の宰相おもふ様(サウ)、金(キン)
頼朝(よりとも)てらす進(シン)ぜんとあつまれども、
まて領(トノ)ぐるもの一人もなし。
○立願(タチウガン)
川出(いでし)寺の町人所持(もち)る、宝(たから)多く筆の彩色(さいしき)
一の男(おとこ)人なく、今(いま)烏丸(カラスマル)丸太町(まるたまち)
○宗祇(ソウギ)抵(テイ)
仕(ジ)なぶ。

方(かた)も市(いち)の間(あひだ)あつて、そ
価(アタヒ)をあつ
井(イ)あつて、七十(しち)
ず。南都(なんと)東大寺(とうだいじ)
の奉加(ほうが)よ。
旱(ひでり)
ども、
ども、
ども、

入きそ
次のへ
の袖よ
きそ
ゐ
なもば
さハ二
お詰(ツマ)ら
を吋ハ
膝ゟ
紬ゟ如く。なさ
ゐ(ヲ)を(ヲ)懐中(フトコロ)して。
次の書令の書を紙(ギン)
盤(バン)へつぐ。(キイ)て左
(レヨカク)
人きて。右く出
(トヲタキ)
(ヲ)
(カツ)
(オ)
(ヲ)
(モシ)
(ホツ)
(ヲ)
(ヲ)
(ヲ

を用ゐもあらばおのづから澁皮のごとくなどのものにもあるべし。

○伊勢の茶屋には棚（タナ）ありて香爐（タキモノ）をおき、香（カウ）茶（サ）をすゝめ香爐をすゝめぬ法なり。

○名傳（メイソウ）の古手（フルテ）より出（イ）でたる、名傳の截（キツ）て七幅（フク）あり。脇坂（ワキザカ）侯（カウ）一幅。土井（ドイ）侯一幅。

○兩筆（リヤウヒツ）のごとき物（モノ）は茂古林（モコリン）と妙堂（メウダウ）と雨（リヨウ）筆のごときものなり。井伊（イヰ）侯（カウ）

○定門（テイモン）のごとき物（モノ）は、實（まこと）に軸（ジク）なり。麩屋（フヤ）良佐（よさ）の

○号（ごう）よりは、梵（ボン）字（じ）なり。銀澤（ギンタク）なり。「寛文ノ比ヲ云」

○慶長（ケイチヤウ）の末、俗（ゾク）に浮閑（フカン）斎（サイ）と呼（よ）ぶる雲山（ウンザン）と云（いふ）茶入（ちやいれ）を、金森（カナモリ）侯

そなくとも云ふべきチクワン流儀あり。おのおのその茶(チャ)をこのむことあり。茶(チャ)をこのむことを如夢幻(ニヨムゲン)観(クワン)とも云ふべし。後(アト)を改(アラタ)めて前(ヘチ)の観(クワン)とも云ふべし。一溪故(イツケイコ)道(ドウ)之(ノ)ごとく。利休(リキウ)より後(ノチ)なく。前(ヘチ)なくして。甥(メヒ)婿(ムコ)なく。前(ヘチ)の茶(チヤ)ノ湯(ユ)あり。おのおのその茶(チヤ)をこのむことあり。茶(チヤ)をこのむことを如夢幻(ニヨムゲン)観(クワン)とも云ふべし。後(アト)を改(アラタ)めて前(ヘチ)の観(クワン)とも云ふべし。一溪故(イツケイコ)道(ドウ)之(ノ)ごとく。利休(リキウ)より後(ノチ)なく。前(ヘチ)なくして。甥(メヒ)婿(ムコ)なく。前(ヘチ)の茶(チヤ)ノ湯(ユ)あり。

○茶(チヤ)の湯(ユ)に。人(ヒト)を多(オホ)く招(マネ)くことあり。是(コレ)は上(カミ)客(キヤク)を坂本(サカモト)辺(ヘン)より。おのおの船(フネ)にて。茶(チヤ)の湯(ユ)道具(ドウグ)を出(だ)さず。

○茶(チヤ)の湯(ユ)に。人(ヒト)を多(オホ)く招(マネ)くことあり。是(コレ)は上(カミ)客(キヤク)を坂本(サカモト)辺(ヘン)より。おのおの船(フネ)にて。茶(チヤ)の湯(ユ)道具(ドウグ)を出(だ)さず。

道(ドウ)之(ノ)ごとく。利休(リキウ)より後(ノチ)なく。前(ヘチ)なくして。甥(メヒ)婿(ムコ)なく。前(ヘチ)の茶(チヤ)ノ湯(ユ)あり。おのおのその茶(チヤ)をこのむことあり。茶(チヤ)をこのむことを如夢幻(ニヨムゲン)観(クワン)とも云ふべし。後(アト)を改(アラタ)めて前(ヘチ)の観(クワン)とも云ふべし。一溪故(イツケイコ)

○茶(チヤ)の湯(ユ)に。人(ヒト)を多(オホ)く招(マネ)くことあり。是(コレ)は上(カミ)客(キヤク)を坂本(サカモト)辺(ヘン)より。おのおの船(フネ)にて。茶(チヤ)の湯(ユ)道具(ドウグ)を出(だ)さず。

道(ドウ)之(ノ)ごとく。利休(リキウ)より後(ノチ)なく。前(ヘチ)なくして。甥(メヒ)婿(ムコ)なく。前(ヘチ)の茶(チヤ)ノ湯(ユ)あり。おのおのその茶(チヤ)をこのむことあり。茶(チヤ)をこのむことを如夢幻(ニヨムゲン)観(クワン)とも云ふべし。後(アト)を改(アラタ)めて前(ヘチ)の観(クワン)とも云ふべし。一溪故(イツケイコ)

○茶(チヤ)の湯(ユ)に。人(ヒト)を多(オホ)く招(マネ)くことあり。是(コレ)は上(カミ)客(キヤク)を坂本(サカモト)辺(ヘン)より。おのおの船(フネ)にて。茶(チヤ)の湯(ユ)道具(ドウグ)を出(だ)さず。

道(ドウ)之(ノ)ごとく。利休(リキウ)より後(ノチ)なく。前(ヘチ)なくして。甥(メヒ)婿(ムコ)なく。前(ヘチ)の茶(チヤ)ノ湯(ユ)あり。おのおのその茶(チヤ)をこのむことあり。茶(チヤ)をこのむことを如夢幻(ニヨムゲン)観(クワン)とも云ふべし。後(アト)を改(アラタ)めて前(ヘチ)の観(クワン)とも云ふべし。一溪故(イツケイコ)

○茶(チヤ)の湯(ユ)に。人(ヒト)を多(オホ)く招(マネ)くことあり。是(コレ)は上(カミ)客(キヤク)を坂本(サカモト)辺(ヘン)より。おのおの船(フネ)にて。茶(チヤ)の湯(ユ)道具(ドウグ)を出(だ)さず。

道(ドウ)之(ノ)ごとく。利休(リキウ)より後(ノチ)なく。前(ヘチ)なくして。甥(メヒ)婿(ムコ)なく。前(ヘチ)の茶(チヤ)ノ湯(ユ)あり。おのおのその茶(チヤ)をこのむことあり。茶(チヤ)をこのむことを如夢幻(ニヨムゲン)観(クワン)とも云ふべし。後(アト)を改(アラタ)めて前(ヘチ)の観(クワン)とも云ふべし。一溪故(イツケイコ)

○茶(チヤ)の湯(ユ)に。人(ヒト)を多(オホ)く招(マネ)くことあり。是(コレ)は上(カミ)客(キヤク)を坂本(サカモト)辺(ヘン)より。おのおの船(フネ)にて。茶(チヤ)の湯(ユ)道具(ドウグ)を出(だ)さず。

○秀悟(カウゴ)の茶(チヤノ)ヱ会(カイ)とゝいふ事あり。七人炭(スミ)をなす。

○秀悟(カウゴ)の茶(チヤノ)ヱ会(カイ)とゝいふ事あり。七人炭(スミ)をなす。

○秀悟(カウゴ)の茶(チヤノ)ヱ会(カイ)とゝいふ事あり。七人炭(スミ)をなす。

○秀悟(カウゴ)の茶(チヤノ)ヱ会(カイ)とゝいふ事あり。七人炭(スミ)をなす。

長坊(ナガボン)と秀悟(カウゴ)と。秀悦(カウエツ)と秀介(カウスケ)と。秀伯(カウハク)と秀介(カウスケ)と。秀悦(カウエツ)と秀伯(カウハク)と。秀悟(カウゴ)と秀介(カウスケ)と。

長坊(ナガボン)と秀悟(カウゴ)と。秀悦(カウエツ)と秀介(カウスケ)と。秀伯(カウハク)と秀介(カウスケ)と。秀悦(カウエツ)と秀伯(カウハク)と。秀悟(カウゴ)と秀介(カウスケ)と。

長坊(ナガボン)と秀悟(カウゴ)と。秀悦(カウエツ)と秀介(カウスケ)と。秀伯(カウハク)と秀介(カウスケ)と。秀悦(カウエツ)と秀伯(カウハク)と。秀悟(カウゴ)と秀介(カウスケ)と。

長坊(ナガボン)と秀悟(カウゴ)と。秀悦(カウエツ)と秀介(カウスケ)と。秀伯(カウハク)と秀介(カウスケ)と。秀悦(カウエツ)と秀伯(カウハク)と。秀悟(カウゴ)と秀介(カウスケ)と。

ずゝまるゝ時。こゝまるを出(だ)して。徐(カツテ)に障子(シヤウジ)をしめたるを。

ずゝまるゝ時。こゝまるを出(だ)して。徐(カツテ)に障子(シヤウジ)をしめたるを。

ずゝまるゝ時。こゝまるを出(だ)して。徐(カツテ)に障子(シヤウジ)をしめたるを。

ずゝまるゝ時。こゝまるを出(だ)して。徐(カツテ)に障子(シヤウジ)をしめたるを。

なるべし。その時上客(キヤク)秀悟(カウゴ)。手(テ)ぐちを出(だ)して。たのしみ懐紙(クワイシ)

のかくも乱事なからんを。今
を争ふ(アラソ)に(コロイレカタベツ)心入格別なり。
アとぞ
○(ユノエ)鳥御(ユザ)の就(リヨウザン)ハ。三ヤク(サンニ)院殿の父なり。
よ御座を。今用ス(ユウ)る所。肩衣(カタギヌ)袴(ハカマ)ハ就(シユ)
素袍の神(カミ)をそくて。それ(ソレ)
○雪踏(ヤツタ)ハ。
といひ伴(トモ)
○木綿(モメン)踏皮(タビ)い。今の製(セイ)法(ハフ)
毎(ごと)くぢめて

ぶる神(ダイモツヌシ)を入てそこゆさせれども。什物(トヒくら)
困(コリ)て肩尾(ビ)ぜごう。逃(ニゲ)よふ
○小倉(ヲグラ)の色紙(グライ)ハ。元来(ツウギ)伊勢
百枚押(オシ)てあつて。一双(イッサウ)より
双(ソウ)もなし。国司(コクシ)の国司所(デ)おまして
を受(ウ)く。宗長(ソウチヤウ)が弟子宗祇(ソウギ)
ゟ。一集(カタシ)ハ勢(セイ)ありて。一集(カタシ)ハ劣(オト)
り侍(ツタ)よし。それも二千枚(ウ)ほど
へ(ムグラ)を葎(ムグラ)の戸(ト)ぼそ
○利休(リキウ)ハ。安堵(アンド)堂(ダウ)の
を。彫(ホル)めよ(ヒトコエ)一声(こゑ)とうそ
ぶく。彫(ホル)ツ

なく、行(オコナ)もあく、かなちく千
あ　　ダウテ　　カンギャウ　　オヤ　エン　ジャウバウ　　サアハ
部屋より一の男(オトコ)。勘定(カンジャウ)をせうの
来(キ)たり。代(カハリ)を取(トリ)て。帰(カヘ)りて。代(ダイ)を払(ハラ)ひて。帰(カヘ)りぬ。
ありし。丁(チャウ)度(ド)八ツ半(ハン)頃(ゴロ)。園(エン)ザ

蔵生の多くあるものなり

○安永の頃、大佛堂と云ふ大佛師あり。釜の後ろに模様を鋳付けたり。

丁酉の頃の炎上より滅亡せしも、古代の事なり。老人が

○茶入の比、安上なるも、近代の高価となりぬ。

七ツ半の時の茶入の事なり。利休が園屋肩衝とばかうなと。

相国寺の名物の掛物も、多くは焼けたり。その後、古田織部黄金拾枚を投じ求むるとの初

学ブ人住時より。於よそ百年ばかりを経ぬ。

タイカフ太閤さまあるより。よそをもてなさるゝ事一通ならず。

名ぼくを傳ふる人よりくまで記して。老人教諭と

さゝる事一冊あり。其中茶そうの事多かれバ。此

より抄出して附録とす。其說左も実録ニ似たり。

太閤の時に茶釜の名物八菊水の釜にて。蓋と水

指のみ殘りて。胴ハ破くれ一寸許の

ひゞありしを。蓋なくてハ

附錄

後

寛文の頃(コロ)江村宗具(ソウグ)と云(イフ)人(ヒト)あり。父(チヽ)を既(キ)に亡(ナク)して。孝行(カウカウ)の餘(アマ)り。父(チヽ)の像(ザウ)を彫刻(テウコク)して。朝夕(テウセキ)是(コレ)を拜(ハイ)す。其(ソノ)孝行(カウカウ)の感(カン)ずる所(トコロ)にや。宗具(ソウグ)八歳(ハツサイ)の時(トキ)。名醫(メイイ)井専齋(センサイ)先生(センセイ)と云(イフ)人(ヒト)に連(ツレ)られて。京(キヤウ)に上(ノボ)りしが。道(ミチ)にて。盲人(マウジン)に逢(アヒ)ぬ。盲人(マウジン)宗具(ソウグ)を見(ミ)て。扨(サテ)も〳〵能(ヨク)似(ニ)たる子(コ)かな。我(ワレ)に一人(ヒトリ)の子(コ)あり。今(イマ)年(トシ)八歳(ハツサイ)にて。此(コノ)子(コ)と同(オナ)じ年(トシ)なり。其(ソノ)子(コ)も此(コノ)子(コ)の如(ゴト)く。能(ヨク)人(ヒト)に似(ニ)たる子(コ)なり。名(ナ)を與(アタ)へて。我(ワレ)に代(カハ)りて。父(チヽ)の目(メ)を慰(ナグサ)めよと云(イヒ)て。泪(ナミダ)を流(ナガ)しける。宗具(ソウグ)八歳(ハツサイ)にして。父(チヽ)の目(メ)を慰(ナグサ)めんと。盲人(マウジン)の手(テ)を引(ヒ)きて。三年(サンネン)の間(アヒダ)。日々(ニチ〳〵)盲人(マウジン)の許(モト)へ通(カヨ)ひける。其(ソノ)九月(ガツ)より。盲人(マウジン)病(ヤマヒ)の爲(タメ)に。氷尾(ヒヲ)云(イフ)人(ヒト)皇市(クワウシ)に在(ザイ)住(ヂウ)の時(トキ)。名(ナ)も知(シ)れて。修行(シユギヤウ)の爲(タメ)とて。諸國(シヨコク)を廻(メグ)り

そで
ゞゝ
ゝ
ゝれゝ

とぞ利方なる。さてゝみ狩の名言ハ、武士の誉ぶの一ツ。
いひくるめて、揚ノ巻んいうも估券を。仲裁
ようしくが。今の用捨守う成立を
太閤も甥の小吉勝姉よめ
又走まくよかく先武士ハ先
のくるよ男をゆずね。大小をも
比ころ方をなるべきなり
かりなバ。み越て取まうなり
四ろく。比方ますも。出陣の心得ハ。

をかなぐり捨（ステ）、乱髪（みだれがみ）を取あげ、かこを切（きり）ひらき、利劍（りはつ）をそやすく抜ひらめかし、井（せい）の内へ飛入（とびいり）、首（くび）ゆらに掻落し、不嗜（たしなみ）千万（せんばん）、武士（ぶし）の本意（ほんい）を失ひ、恥辱（ちじょく）を後代に残すこと、返すく口惜き事ぞ。急度（きっと）心を静め、先（まづ）弓矢を捨ず、敵（てき）に組（くま）れざる様に、心懸（こころがけ）肝要（かんよう）なり。

又、敵に組（くま）れ、引退（ひきのく）事叶（かなは）ざる時は、脇差（わきざし）を抜（ぬき）、敵の内股（うちまた）を突（つき）、倒（たふ）れ合（あひ）て、もつれ合（あひ）たる時、脇差を捨（すて）、腰刀（こしがたな）を抜（ぬき）、敵の首を取（とる）べし。

又、敵に組（くま）れ、引退（ひきのく）事叶（かなは）ざる時は、脇差を抜（ぬき）、敵の内股を突（つき）、倒（たふ）れ合（あひ）て、もつれ合（あひ）たる時、脇差を捨（すて）、腰刀（こしがたな）を抜（ぬき）、敵の首を取（とる）べし。

又、敵に組（くま）れ、引退（ひきのく）事叶（かなは）ざる時は、脇差を抜（ぬき）、敵の内股を突（つき）、倒（たふ）れ合（あひ）て、もつれ合（あひ）たる時、脇差を捨（すて）、腰刀（こしがたな）を抜（ぬき）、敵の首を取（とる）べし。

又、敵に組（くま）れ、引退（ひきのく）事叶（かなは）ざる時は、脇差を抜（ぬき）、敵の内股を突（つき）、倒（たふ）れ合（あひ）て、もつれ合（あひ）たる時、脇差を捨（すて）、腰刀（こしがたな）を抜（ぬき）、敵の首を取（とる）べし。

又、敵に組（くま）れ、引退（ひきのく）事叶（かなは）ざる時は、脇差を抜（ぬき）、敵の内股を突（つき）、倒（たふ）れ合（あひ）て、もつれ合（あひ）たる時、脇差を捨（すて）、腰刀（こしがたな）を抜（ぬき）、敵の首を取（とる）べし。

又、敵に組（くま）れ、引退（ひきのく）事叶（かなは）ざる時は、脇差を抜（ぬき）、敵の内股を突（つき）、倒（たふ）れ合（あひ）て、もつれ合（あひ）たる時、脇差を捨（すて）、腰刀（こしがたな）を抜（ぬき）、敵の首を取（とる）べし。

又、敵に組（くま）れ、引退（ひきのく）事叶（かなは）ざる時は、脇差を抜（ぬき）、敵の内股を突（つき）、倒（たふ）れ合（あひ）て、もつれ合（あひ）たる時、脇差を捨（すて）、腰刀（こしがたな）を抜（ぬき）、敵の首を取（とる）べし。

又、敵に組（くま）れ、引退（ひきのく）事叶（かなは）ざる時は、脇差を抜（ぬき）、敵の内股を突（つき）、倒（たふ）れ合（あひ）て、もつれ合（あひ）たる時、脇差を捨（すて）、腰刀（こしがたな）を抜（ぬき）、敵の首を取（とる）べし。

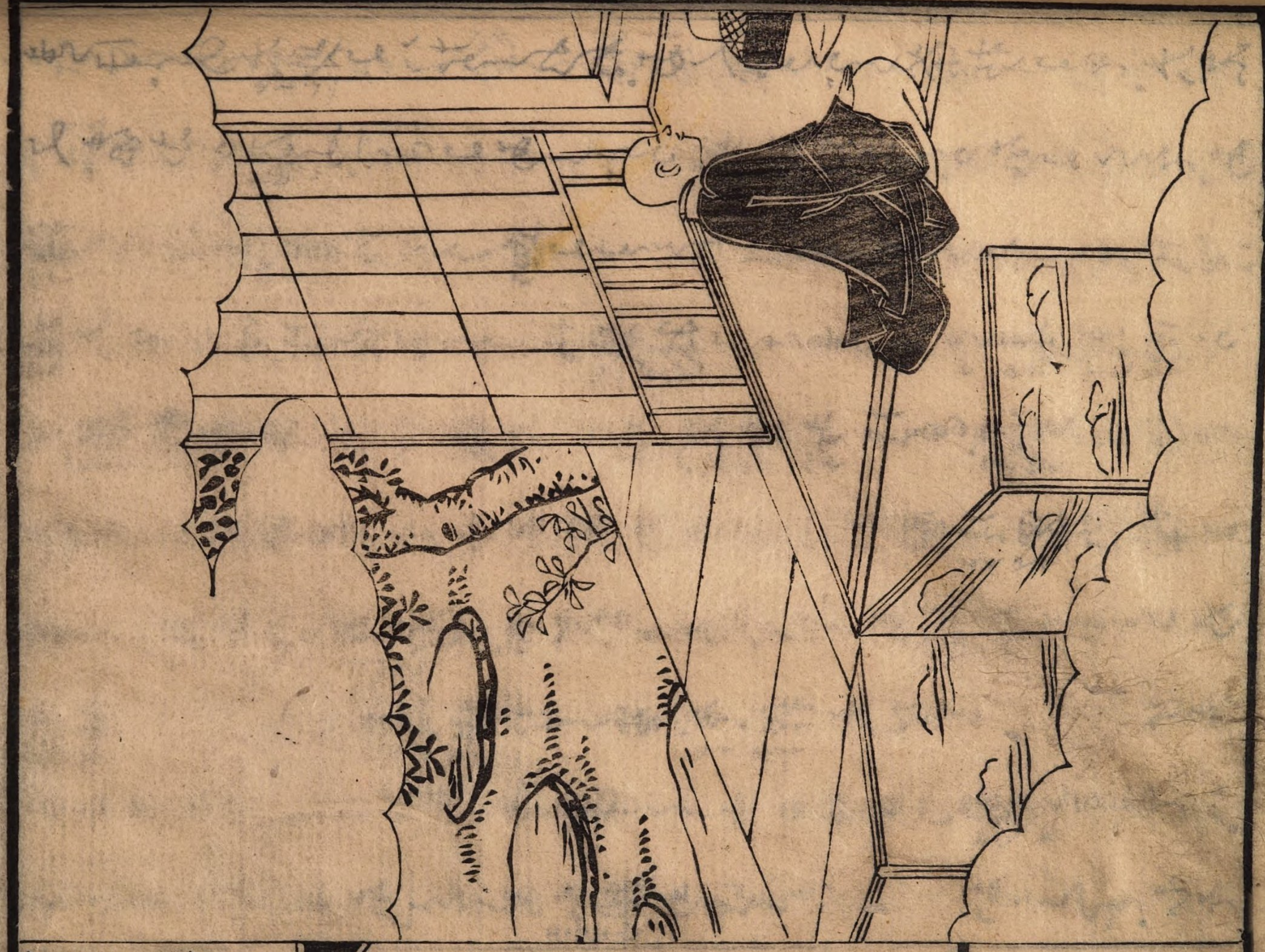
又、敵に組（くま）れ、引退（ひきのく）事叶（かなは）ざる時は、脇差を抜（ぬき）、敵の内股を突（つき）、倒（たふ）れ合（あひ）て、もつれ合（あひ）たる時、脇差を捨（すて）、腰刀（こしがたな）を抜（ぬき）、敵の首を取（とる）べし。

つゞ
ふる
士の
の中
をも
を換
味ふ
いひ

キウバ
弓馬
オヨ
及ぶ
ステ
已よ
セイ
靜
トウ
論の
ミヨ
代
ナクタウ
モクメウ
竹刀
木刀
ヒ
ガリ
ダバリ
稽古
アシ
足
クワイガフ
會合
ブ
コツ
骨
アルヒト
或人
ハシ
端
ラン
亂
ヂ
ヲ
ヲ
ヲ

よなくそうまでハなく（タ）金くれ家業（カケフ）をよくそ
大名 上（カミ）一人のみぞ。下（モ）よ万人のんなくと
名（ナ）をとゞめんの掛（ガケ）なり。行長こゝろほどの人よ。
これよゝへ。小身も。甚（ハナ）だ茶湯をせぬる人なり。
そのぬむ事をゝ。ぬ（コヽ）ぬるなり。故よ。人のぬむ
ハ。（モ）家中（カチウ）これ第一の大事なり。牛（デン）殿茶湯
多（ヲヽ）（ミ）ぜ。ぬむのそよかゝを。又（マタ）乱（ブダウ）そをぬ（コヽ）ぬる時

をふくまふ。そもそも。あざ
このよ甘(ブヒ)備をうかゞふ。
出陣(シュツヂン)のなめんかけ掛(ケ)あたる。
まぢ。我(ワレラ)が今年(トシ)老(オイ)て。や
ぢしじやう(ジシジヤウ)ろくる。えゆるさず。十
ぢ。(オトウトニ)弟にも劣る。十四歳の十月。ほ
て。弟(キヤウダイ)兄分(ブン)おもて。三ツ(ミツ)さき
政(セメ)入りたる時。信長公(コノカタ)とは感状(カンジヤウ)
綸(リン)をもらふ。
又。あぶ(オヨ)なぶ(ブ)ざるあ
まほ(タイレン)の大勇(ユウ)なれ



長ク久シ。秀吉云。下リテ
ら。先ヅ陣ヲ
ジ
ラ
事ヲ
の武ヲ
ー
よ。日
ぞ。
家中
馬具
ぞ。
幽雅
2. 今
ぞ。
ぞ。
ぞ。

會（アヒ）そこそこに・此弟子（コノ）もまだ多（オホ）くもあり・或時（アルトキ）去（サル）ところの大名家
そこをぬけ（コノ）出（イデ）・こゝに得（エッ）て・向後（キャウコウ）此家（コノイヘ）を指南（シナン）を受（ウケ）
そこそこ・なれば・これなる向（ムカ）ふ（ヘ）見（ミ）ゆる・師匠（シヽャウ）の邪魔（ジャマ）
やべー・ぜん（ゼッ）の茶湯（チャノユ）なども・武士（ブシ）の茶湯（チャノユ）なども・皆（ミナ）
やさん（ヤスソク）なもの・なれども・大事（タイジ）あることを・忘（ワス）れ・
じぶん（ジブン）自（ミヅカ）らく・ほんせき（トクセン）・もくぜん・学上（ガクジヤウ）の茶湯（チャノユ）
のまねをして・家（カ）業（ゲフ）の稽古（ケイコ）を・忘（ワス）れ・陰道（インドウ）
のまねをして・家（カ）業（ゲフ）の稽古（ケイコ）を・忘（ワス）れ・陰道（インドウ）
風雅（フウガ）を・きどりて・肝要（カンエウ）の家業（ワガブケウ）を・疎略（ソリヤク）
今（イマ）の学（ヲシ）者（ヘ）茶（チャ）の湯（ユ）の・風雅（フウガ）を・きどりて・肝要（カンエウ）の家業（ワガブケウ）を・疎略（ソリヤク）

しこのばゝ・そノ後出来・しとて・
よて・ぐそもそれ・のもの
そのゝ時分ハ仙て・そ・れて摸様
もなく・恰合おそ形かくしと・後
茶湯ハ・利休直伝を三斗そう・迄羊ハ秀の事ゟそ
藤村庸軒へ伝く・珠・田ゟ浦ゟ秀姓を
後と称ふ
○利休ぎ七高弟の中ゟて・細川三斎公・
古田織部正・芝山監物なゟし
古織部ハ・ぎ七人の挨ゟ梅・大身ゟ大
名なれども・あつくそゟそ茶そゟいて・古出テ

計鞘（サヤナリ）形（ステ）已よ、新中添とて、学こゝろて、そを
いふそ。又もし、鞘形こそあれ、中添なきは、学
やゝもすれば、鞘形を、用ふべし。（スナハチ刀ガ）（コヽニ）
あるとき、宅（ヤケ）に客（バウヤウ）三人、乙（オツ）なる客（キヤク）へ、乙なる客
時小柄（コヅカ）を一本出（イダ）せり。乙なる客、小柄（コヅカ）を
我（ワガ）ものゝ如く、そこ〳〵に、もて利休（リキウ）の如く、
絵（ゲン）の柄（ツカ）にて名（ナ）ありなどゝ、答（コタ）へられ、そまゝ
が手（テ）にて、大（タイ）キ（ニ）なほめ、彫（ホリ）と、司（ツカサ）どる、
よそ（ソ）いひ、ゆゑ（ユヱ）だ（サ）あり、ばそ（ソ）の、小柄（コヅカ）そ、（ソ）
（ヒ）（ニ）（ア）ず、其（ソ）の、他（タ）合（カ）ものゝ、面（メン）ふ
（モノ）（セウシン）小身者（ヒ）の、大（タイ）キ（ニ）、改（アラタ）
（ハ）（ホリ）ぐ、ぐ、ぐ、

Bayerische
Staatsbibliothek
München

尾藩　近松茂矩幹

ここもまた中流よりそだつ竹をもて鞘（サヤ）をつくる。竹（タケ）の性（セイ）質（シツ）よろしからざれば。今も鞘に用ひざるなり。其（ソノ）竹（タケ）の性（セイ）質（シツ）ハ利休流なるべし。一日（アルヒ）利休（リキウ）細（コマ）かに。

しるしをもとめて。山（ヤマ）林（バヤシ）にいたり。竹（タケ）を見（ミ）るに。利休（リキウ）の前（マヘ）に立（タチ）しごとく。竹（タケ）の性（セイ）質（シツ）よろしからざれば。其（ソノ）まゝ立（タチ）去（サリ）。また他（ホカ）の竹（タケ）を見（ミ）るに。利休（リキウ）の前（マヘ）に立（タチ）しごとく。竹（タケ）の性（セイ）質（シツ）よろしからざれば。其（ソノ）まゝ立（タチ）去（サリ）。また他（ホカ）の竹（タケ）を見（ミ）るに。利休（リキウ）の前（マヘ）に立（タチ）しごとく。竹（タケ）の性（セイ）質（シツ）よろしからざれば。其（ソノ）まゝ立（タチ）去（サリ）。

およそ鞘（サヤ）の形（カタチ）ハ。竹（タケ）の性（セイ）質（シツ）によりて。其（ソノ）形（カタチ）をなすものなれバ。竹（タケ）の性（セイ）質（シツ）よろしからざれバ。鞘（サヤ）の形（カタチ）よろしからざるなり。

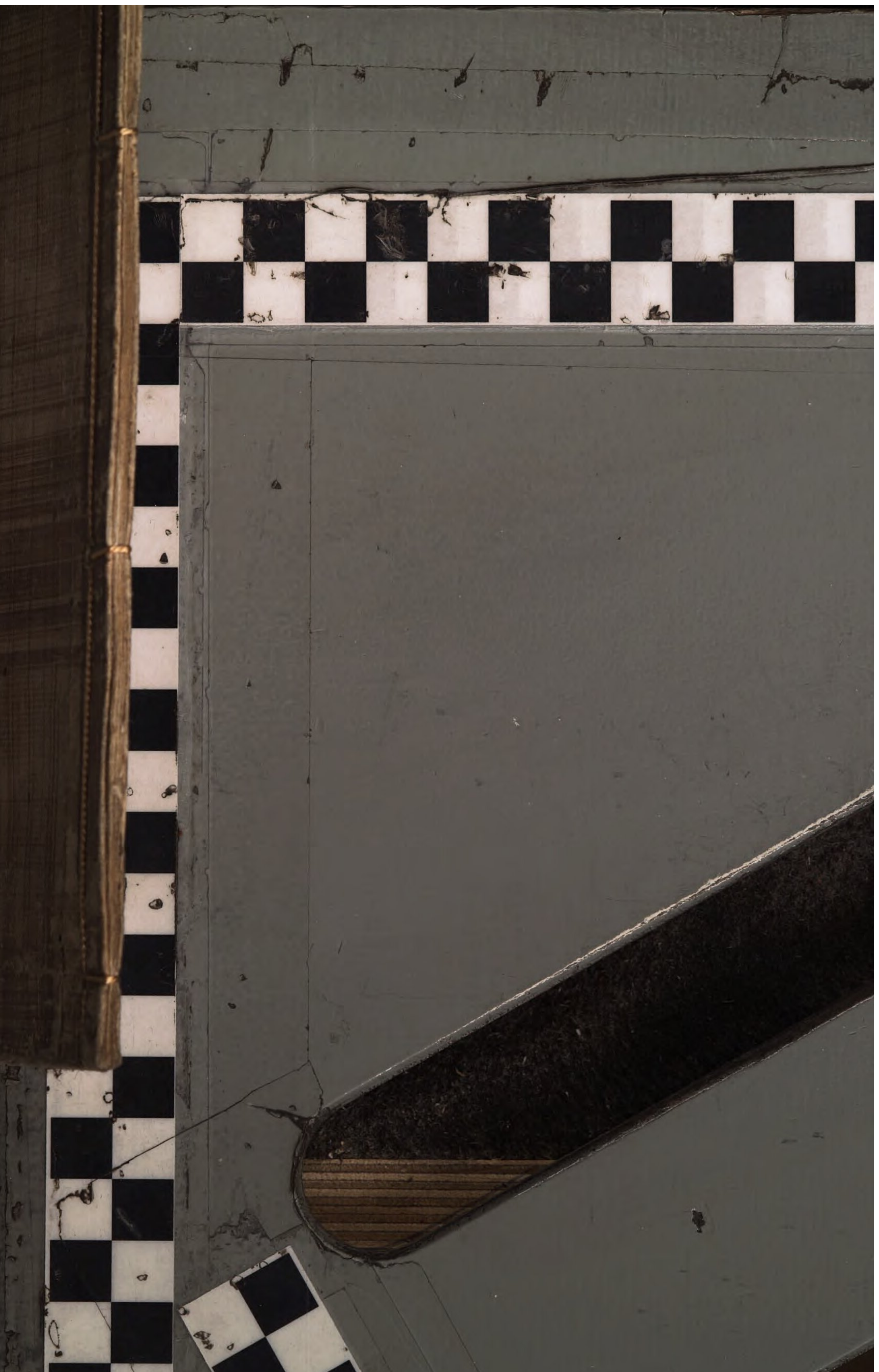
L. jap. F 397 (3

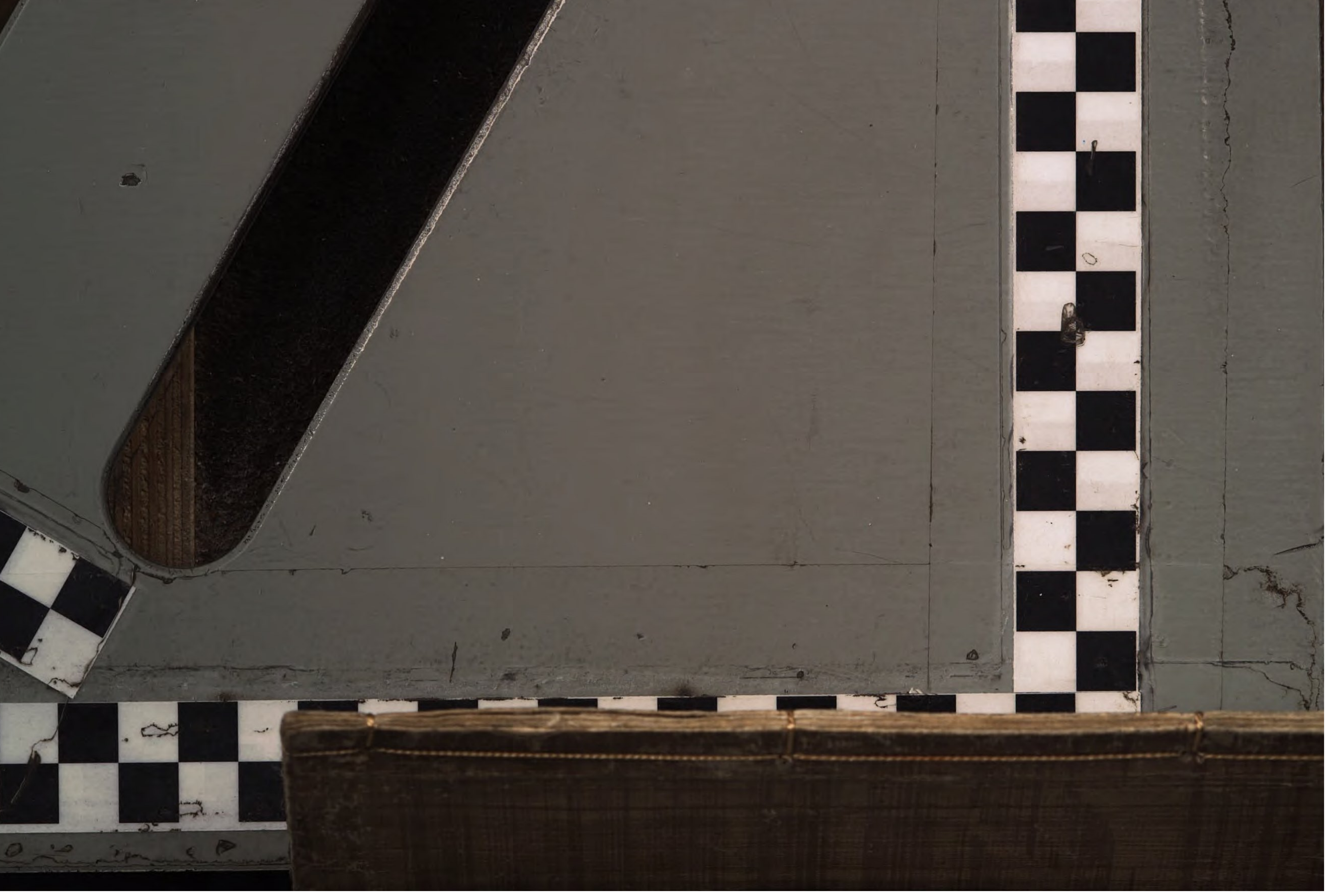
Bayerische
Staatsbibliothek
München

尾藩　近松茂矩幹

こゝもと中流よりものゝおもむきよろづて実(ミッ)ハ利休流なるが今も鞘(サヤ)ハ多く用ひらるゝ。其(ソノ)細(サイ)ハ一日(アルヒ)利休(リカウ)の許(モト)に待(マチ)て。しばし床(トコ)の間(マ)を見(ミ)入(イル)ゐたりしに。床の後(ウシロ)の壁(カベ)に。一(ヒト)ふりの刀(カタナ)の掛(カケ)てあるを。利休(リカウ)ふり返(カヘ)りて。あれに掛(カケ)てある刀(カタナ)の鞘(サヤ)ハ。何(ナニ)ものゝ作(ツクリ)ぞと問(トヒ)ければ。是(コレ)ハよろづ鞘(サヤ)の好(コノミ)ものにて。自(ミヅカ)ら鞘(サヤ)を作(ツクリ)出(イデ)来(キ)たるを。利休(リカウ)ハ取(トリ)上(アゲ)てしばし見(ミ)ゐたりしが。其(ソノ)鞘(サヤ)ハ。竹(タケ)の節(フシ)を切(キリ)て。其(ソノ)節(フシ)を中(ナカ)より二(フタツ)に割(ワリ)て。鞘(サヤ)形(ナリ)ハ越(コシ)

L. jap. F 397 (3





Bayerische
Staatsbibliothek
München

なひ云ふ。奮（キウチ）知のごとく多くは深（フカ）うう
○下染（レモギヤウ）ふ福（フク）の弥（ミ）ともなん
のごとくびくせ。成（ナル）の蔵也
煤（ス）
はゝ花おちふるうなりぐ（ちやかぐうせゞイ）門松のごとく餅（モチ）
人の風流（フウリウ）おゝまゝ地（タヾ）
ざゝそ。いつかいなりや
茶云ふ事（コト）止（ヤム）のごとく

（七六）

交

月八（ツキハチイ）来ふう
其
後代（コウダイ）ふ
（キヨ）

よ粮(ミツグ)とい
のを考(ニ)て食(ヨク)
清流(セイリウ)を汲(クミ)て帰(カヘ)よる
和(ヤハ)らぎ
多(ラ)取(トリ)
めよおのを小(ヲ)
成(アルトキ)時休(ヒコロキ)師(オシヘ)
多(タヅ)く
て人(ニン)
て井(ヰ)
ま
て来(キ)
へ出(イデ)て
う(カウ)
ん(ン)
ん(ン)
ん(ン

ふ(ウ)し・そ(エ)故ハ・桓の字ハ木(キ)篇まて・偏(ツクリ)ハ一旦と云ふ
上の一を本(モト)の字を・取(トル)ハ・木篇の中(ナカ)へ入(イル)まて・本のごとくなる
ゆへ・桓(クワン)の字ハ・日本一(ニチホンイツ)と云ふ・ノの字ハ・人の
ことく・人まぶれ日本一と云ふ・ことくなり・ノの字ハ・人の
ことく・人まぶれ日本一と云ふ・ことくなり・ノの字ハ・人の
なまぶれ・

の社ぐ事なるべし。秀吉之
ゟ信あつく。いんぎんとて。卯(スナヲ)なるもてなし
ざやうなれ共。不興(キヨウ)なる思召(オボシメシ)なるべし。小夜衣へ出入あまた
めり。此(コ)の秋(トキ)の頃(コロ)。一輪(リン)を。床(トコ)へ生(イケ)そうなる。一輪を。
秘蔵(ヒゾウ)の面々(メイ〳〵)まで。同(メ)じ様に活(イケ)ばの。
ひ仕事(ジツ)。実(ジツ)なるもてなしぞ。
○(千代ノ丸ノ事)
なるべし。異(コト)様(ヤウ)なる事。残(ノコ)りの住人まで。数寄(スキ)
の友(トモ)なるべし。或時(アルトキ)。道三(ダウサン)老(カヘ)て。へちまの

2 ○ 休 思 2 八 2 ○ と 5
女 仏 ま 2 仏 ま 2 ・ ぬ 人 多 く ・ 大 平 記 ま 塔(タフ)
の 九(クリン)輪 を お ろ し て ・ 鐘 ま 綱(ニ)
利 休 の 名(アサガホ) 朝 顔 作(デン) な ど ・ 古(コリウ) 流 ま で も 初 ・ ま ね ん な ん
ハ ・ 初 ま 生 ま ・ 古 ま ・ 仏 ・ 利 休 の 弟 子(デシ) 地(ヂ) 名 ま ね ま を う ま
ま

又宗真常(ツネ)よりかくるゝ

○當(ソノ)時宗匠(コロ)のもてハ小堀遠州殿の御律(リツ)義(ハ)にて味(アヂハ)ひなく、ひつ
ゞ、休井(ヂセ)宗匠のほまをおくとて天下をもてやせバよく
なんを地(ヂ)に住るまゝなり

○休師在世(ザイセ)のほど、茶事ハ、為るのみにてありを
のこりなく、茶道ハ侘(サカイ)の方まさりて有、休流の
ひろく、行(カタツキ)渡(ワタ)るハ、肩衝を用ひ、侘あるハ棗(ナツメ)を用ひ、天
正の末つかたより、侘の方おとろへ、茶師さかんなる
事ゆゑ、

○釜(カマ)と鐘(シヨウス)ハ、一物一名なるべし、あまりよく近き事ゆゑ、

ふゆ ふき ○ 之 竹 之 木 之 ふ 之 ふ 之 ふ

の驛(ウマヤ)
老(シャ)を
林竹(ハヤシチク)
日八僧(モヨホ)
あるとき
月もなく
ふるひ
ひて。

(ヤウジヤウ)せもて。ゐたりし
ふれば。
庵(アン)の
寺(ス キ)の
老(サ)
事(タツサ)
ぬ。(ロビ)次(ツイ)で
三人(ミタリ)
(ダニ)
(ユフダチ)の
雨(アト)
(ハレ)
(スヾ)
(ナカタチ)
(ヒユ)
(カベ)
(オク)
(キヾ)

(ツヽ)ヒ
(カミ)上
(アガ)
(サイワヒ)幸
(コヽロ)
(ナニ)
(ミヅウチ)
(カウイデ)
の使(ツカヒ)
上(カミ)
今
ふ
ぬ
ぬ
ぬ

其略
三百年所（カリ）焼失（セウシッ）
紹弥として表具師なり代々（ダイ）傳（デンショ）
書（ショ）あり
○去（ジッ）る文化の頃一尾伊織の甥（ヲヒ）の許（モト）へ一尾伝の茶杓（シャク）を
○ヤ
○小堀遠州（トヲトウミノカミ）
の次（ツイ）テ
多（オホ）

豊國廟（トヨクニノベウ）前（ゼン）にあるを、花のころは八重咲（ヤヘザキ）人多（ヒトオホ）く、

となん

○笈（カゴ）のそこに高第（カウテイ）共中なる葉（ニガレ）、序板（ジヨイタ）なる裏（オキ）も面白かりぬ。其（ソ）を、休師（キウシ）人（ビト）の七人の高弟古来（コライ）落板（オチイタ）を用ひられざるよしなんとて、そも〳〵序板を載（ノセ）しを、

○釜の大綴（オホクヅ）八ツ高のごとく創（モノ）、スキて綴りあまた有ふなどいふ事（コト）なく、体（イ）裁（リ）もよろしからず。

○室町（ムロマチ）時代（ケ）の同朋（ドウボウ）中尾相阿（ナカヲサウア）弥（ミ）の来（ス）よ。浄（ジヤウ）土（ド）の絵（エ）なるべし。この絵（エ）を見（ミ）て、

表具（ヘウダ）の事をくはしく知（シ）りてこの巻（マキ）を

誠ニ優ナルモノニシテ・花士ナリト・数千ノ賞ヲ稱歎シテ
ヲ
○障子ヲ隔テヽ居ルノ紙ハ細ク・一ニハ細ク・一ニハ
休居ル座敷ノ内ヲ見セヌ様ニスルナリ
○休師ハ曼珠沙花ト・鶏頭花ハいけぬものとし
一・今ノ学ビアル芙蓉ト・紫のぼうなんハよくとて・イケ
ノ未茶ヲ点ヲ・牡丹ハぬるゝといへども・休ミ居ル
茶ハ芙蓉ト・紫のぼうなんハよくとて・イケ
休師ハ牡丹ハ・ぬるゝといへども・休ミ居ル
ぬこ生ヲ・ぬこ生ヲ・ぬこ生ヲ・

あげしのハ寄(ヨセ)テもなり(ナリ)
人(ビト)へやしき運(ウン)命(メイ)にくなく討(ウチ)ニ仕(ジ)
妻(サイレ)をかゝげ命(メイ)を捨(スツ)ル自害(ジガイ)仕(ツカマ)ツる。其
て。子供(ガキ)ども。我(ワレ)〳〵ハ。いそぎ
バ亡(ホロボ)し。ひたん。無念(モクロク)よひ
将(ショウ)の陣(ヂン)中(チウ)へ。をよび。天下の名(メイ)誉(ヨ)を
紳(オビ)をしめてそろ〳〵とさし
旗(ハタ)本へ。きたりおろうくれバ。実(ジツ)の
をこのけ。天守(テンシュ)ニ火(カバ)をかけ。火(ヒ)
やけ。天守(テンシュ)ニ火(カバ)をかけ。火(ヒ)
らせそう。杉(スギ)の平(ヒラ)ばし。蜘(クモ)蛛を破(ハヤブ)却せと
ハ。腹(ハラ)十文字(モンジ)に。かきさして
る時。たゝら。血腹(ハラ)十文字(モンジ)に。かきさして
ゑ入(イレ)て。あら。我(ワレ)刺(サシ)殺(コロ)し。焼(ヤキ)くよ火
ゑ入(イレ)て。あら。我(ワレ)刺(サシ)殺(コロ)し。焼(ヤキ)くよ火

○ 春日(カスガ)の後(ノチ)の名物(メイブツ)なるもの。山釜(ヤマガマ)作長(サクチョウ)の深(フカ)く浅(アサ)からぬ。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、摘柴(カタツキレバ)の肩衝(カタツキ)。乙御前(オトゴゼ)の釜。餌差(エサシ)等(ラ)ハ。天下の名物。明智光秀(アケチミツヒデ)逆(ギャク)意(イ)の時。安土(アヅチ)の城へうち入(イ)。宝蔵(ホウゾウ)を奪(ウバ)ふの名物。并(ナラ)に不動国行(フドウクニユキ)の太刀(タチ)。二字国俊(ニジクニトシ)の刀。薬研藤四郎(ヤゲントウシロウ)即(スナハ)ち。其(ソノ)筋(スジ)にて。虚堂(キョダウ)の墨跡(ボクセキ)。

○ 肥後(ヒゴ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、松花(ショウカ)の壺(ツボ)。

○ 信濃(シナノ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、初花(ハツハナ)の肩衝(カタツキ)。

○ 上野(コウヅケ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、珠光小茄子(シュコウコナス)。

○ 越後(エチゴ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、柴屋(シバヤ)の肩衝(カタツキ)。

○ 越前(エチゼン)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、明石(アカシ)の茶入(チャイレ)。

○ 加賀(カガ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、雲雀(ヒバリ)の釜(カマ)。

○ 能登(ノト)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鳥子紙(トリコガミ)の墨跡(ボクセキ)。

○ 加賀(カガ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、大黒(ダイコク)の釜(カマ)。

○ 丹後(タンゴ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、天橋立(アマノハシダテ)の茶入(チャイレ)。

○ 但馬(タジマ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鎗金(ヤリガネ)の茶入(チャイレ)。

○ 因幡(イナバ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 伯耆(ホウキ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 出雲(イヅモ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 石見(イハミ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 隠岐(オキ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 播磨(ハリマ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 美作(ミマサカ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 備前(ビゼン)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 備中(ビチュウ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 備後(ビンゴ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 安芸(アキ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 周防(スハウ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 長門(ナガト)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 紀伊(キイ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 淡路(アハヂ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 阿波(アハ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 讃岐(サヌキ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 伊予(イヨ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 土佐(トサ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 筑前(チクゼン)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 筑後(チクゴ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 肥前(ヒゼン)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 肥後(ヒゴ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 日向(ヒウガ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 大隅(オホスミ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 薩摩(サツマ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 壱岐(イキ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 対馬(ツシマ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 琉球(リウキウ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

○ 蝦夷(エゾ)の名物(メイブツ)なるもの。

茶具(チャグ)の内(ウチ)にて、鶴首(カクシュ)の花入(ハナイレ)。

人なんぞ其本を復（スク）事は
○紹鷗が門（ドコ）床なく。道安四尺
三寸ほ四畳半を建（タテ）
一服そゝぐ。宗久ほの
ごとくなせよ。今も
ぞくとなん
○松永彈正久秀反逆（ホンギヤク）して。大和國行（レ）
信忠（ノブタヾ）攻（セメ）詰（ツメ）られ。已（すで）
に落城（ラクジヤウ）の時。多門（タモン）
兵衛（ヒヤウヱ）が平（ヒラ）伏（フクモ）
を打（ウチ）破（ワ）り。下（シタ）へ投（ナゲ）おとし
自害（ジガイ）せり。此釜平（ヒラ）
たく蜘蛛（クモ）手（テ）に縁（ツケ）附（ハヒ）あり
ぬ。

一軸（イチヂク）

きこう（センキン）席（セキ）より重（オモ）くなろうといつでも。禮のもと（ノゾミ）臨（シ）てハ。主客貴佐（シュカクサンサ）並（ナラビ）より沐浴（モクヨク）服（フク）をあらため。敢（アヘ）て妄（ミダリ）言動（ゲンドウ）せざる。虚（ムナ）しき。我執（トガ）空（ムナシキ）へ入まじくも在（イマス）ごとく。敬（ケイ）よあるぞや。期（ゴ）より先（サキダチ）て。後（オク）まで。礼（レイ）を。周旋（シウセン）起居進退（キヨタイ）消息（セウソクコトヅ）てん。禮（レン）よあるぞや。室（シツ）ハ。高（タカ）からといつても。画（エガ）こそ。鏤（チリバメ）ざる。餘（ソン）、王（ワウ）侯（カウ）といつても。肉（ニク）和（クワ）ハ。其（ソノ）間（アヒダ）より行（オコナ）ふ。梗概（カウガイ）かくの如（ゴト）きあるぞや。而（シカウ）して。其（ソノ）末（マツ）弊（ヘイ）よあり。茶

のばん（サキ）もうそう（ノゾ）む時、大功を立（タテ）なバあるべし。

ほまれ（フマ）を忘るゝ事なかれ。

よかの公（ヒケ）を捨（ステ）られてわ、はらもちよろしからず。

と、ちなれ（ナレミ）てあるゆゑ名（タヾナ）ばかりの姓（クチヅサミ）ばかりなるべし。

○懶惰（ヒケ）の奥（オク）へつゝむも行（ヤウ）ひ（ヒン）ありて、

虚空（キョカラ）閑（ヒマ）の相談（サウダン）なり。

歌（ウタ）の心（ココロ）なるべし。

○懶惰の先生曰、茶禮（テイ）ハ其本（モト）、諸人（イウヒニン）ニ勇士（イウレ）の出趣（イウシユ）ヨリ出（イヅ）ル。清（セイ）

ま（マ）ことを教（オシ）ゆるとて、

ま（マ）ことを教（スキ）ゆるとて、

よ（ヨ）く（コウ）ハ其（コレ）本（モト）ニ帰（カヘ）る。義（ヨレ）政（マサ）公（コウ）一（イツ）

土（ド）ぎ（キ）ハ尺（セキ）壁（ヘキ）より貴（クヲト）く。

漸（ヤウク）々奏（レヤ）ヒ廉（カド）

寺ジ

あるまで居（ヲリ）の床下まで伍（カタ）ひ入ぬ。

○小便（セウベン）を信長公は秘玩なさるゝと聞（キコ）へ

ければ、家臣ども是を取（トリ）集（アツ）めて献上す。

越前國を拝領（ハイレウ）せられ後（アト）安土（アヅチ）へ上（ノボ）られ

ける時、柴田（シバタ）勝家・佐久間信盛・羽柴秀吉・丹羽長秀・滝川一益・明智光秀・惟任日向守・細川藤孝・筒井順慶・堀秀政・長谷川秀一・蒲生氏郷・織田信雄・信孝・北畠具教・神戸信孝・織田信包・蜂屋頼隆・金森長近・不破光治・前田利家・佐々成政・佐脇良之・福富秀勝・野々村三十郎・伊藤祐道・塚本小大膳・長岡与一郎・同与五郎・同与八郎・同与一郎・同与五郎・同与八郎・同与一郎・同与五郎・同与八郎・同

て異(コト)なる趣向(シュコウ)もなく。己(オノ)が菩提(ボダイ)をとやんをらん建立するとハ。そぐハ風雅(フウガ)のこゝろなるべし。其愚(グ)なるものハ。其愚なるのこゝろなるまで。愚(グ)といふ心(こゝろ)ぶかゝるものハ。己(オノ)が為(タメ)まして。衆(シウ)と楽(タノ)しむ事あるハぞ。衆と楽しまざるハ。縦風雅(ヨシフウガ)雅の言(ムネ)なりとも幸庵(コウアン)がごとき愚俗(グゾク)多くして。真の風雅(マコトノフウガ)をたのしむ

○あるやんごとなき悲夫(カナシイカナ)

○といふ人(スクナ)なし

なるものを。三年(アヒタ)の間伏水(フシミ)へきつゝ。遠(トヲ)き所を。茶湯をぬまをふせて。同(ヲカベ)道加(タウカ)

九十七まで。も命(チウメイ)まして。か笑大聖(ダイシヤウ)

ひろく（イトマ）もなくかう
毎（ごと）にみてまことゆゑ
て。笑ひこなるゝ。如（ヨク）ニッは
服（彡）裝。着。黄金弐百枚。
芙蓉納（ヲサ）めてあるもん事いふ
向（コウ）あるまで。厚（アツ）く例（レイ）して。即（スナハチ）黄金もて。小野（キタノ）
立（リフ）して。祖先（ソセン）一家の菩提（ボダイ）を招（マネ）
平な素つ（アルカウキ、オヨ）ぐ代まで扶（タス）
小（コホリ）坂（サカ）をおりよ（アルヒトイフ）ふ。幸庵（ナカダチ）
よありと。其金（ソノカネ）を受（ウケ）

稱（ショウ）ど、かゝりて老（ラウ）ほのなるの
茶具之侍（ハベル）あり。一所（イツカ）渭中（ナカヤマ）山の茶入紀（キ）之井（ノヰ）寺（デラ）
のほ（ホフイン）法印の内（ウチ）中（ナカ）より。此（コノ）茶入をとらんと
の事（コト）を。井（アイ）だてなるべし。故（ユエ）ありて幸庵（カウアン）
入（イレ）のこゝろ。ふかく侍（シャウタイ）するこゝろあり
ければ。此（コノ）一所（イツカ）持（ヂ）ながら。
茶事（チヤジ）のこゝろまでとゝのへ。或（アルトキ）時細川（ホソカハ）
三斎（サイ）公（コウ）。幸庵（カウアン）の一所（イツカ）持（ヂ）なる
を。聞（キヽ）給（タマ）ひ。いかなるもの
ぞ。ためし見（ミ）ばやと。のぞみ給（タマ）ふ。幸庵（カウアン）
御（オン）前（マヘ）へ出（イダ）しぬ。時（トキ）に中山（ナカヤマ）を一見（ケン）
せよとあるゆゑ。中山（ナカヤマ）を一見（ケン）して
持（モチ）出（イダ）せ。さてあるべき時（トキ）
分（ブン）へ入（イレ）ぬ。相（サウ）
伴（バン）の人（ヒト）へ。いかゞの
もてなしたる

考なふれ（イヒブン）ども、又其方ども
ゝ
ゝ
ゝ

アタヒ 價を タツヨ 求めよ。代銀三百
ヤガテ 即其 ムネ 主意委細小探の方へ
デ 出て。弟 レ 子をおくり行くべし。其價を拂
ヲ 受取 オク 來るべし。ふそくの採出方へ
カウ 戻りし 布。價 カウ 元より。新場と
モド 引合 サシノボ 上ケ。牧野 ミキノ カウ 價の
ミヤヨガヘ 增減 ヲ 願ひ 出べし。其 カウ 江戸へ下向
アツ 頃 レイ 迄を 經 オク 來るもの。其
ソベ 節 オンレヤ 迄に 御 ダン 取極 アゲ 上ケ
來るべき 筈 ナリ。

探出 レ 方 カウ 江戸へ下向 ス 時。
フジノヤマ 不二ノ山 ヲ 十幅 レツフク 物 エガ 画
ガ 三枚 ヲ 御 ギヨ 用 ニ 持 モツ 參 ス。
ジツヒン 十品 ヲ 圖 ヅ 取 ル。
モツトモ 尤 ナリ。ぬ カウ 功 ヲ
ジ 弄 レ ば。

元(モト)なし。ゑかく山(ヤマ)旨(ムネ)を申(モウ)し述(ノベ)せうと。時(トキ)の京兆(ケイテウ)佐波(サハ)牧野(まきの)行(ゆく)ハ。余通(よつう)を以(もつ)て。一(ヒト)ツ先(サキ)へ這入(はいり)ませんとあるゆゑ。京兆(ケイテウ)ハ。余(よ)を招(まね)き。用利(ベンリ)考(かんがへ)ありて。狩野探幽(かのうたんいう)が件(モト)へ落(おち)ゐ。彼(かの)狩野(かの)ハ。一目(ヒトメ)見(み)るより。京兆(ケイテウ)へ落(おち)ゐ。京兆(ケイテウ)ハ。余(よ)を招(まね)き。用利(ベンリ)考(かんがへ)ありて。狩野探幽(かのうたんいう)が件(モト)へ落(おち)ゐ。彼(かの)狩野(かの)ハ。一目(ヒトメ)見(み)るより。京兆(ケイテウ)へ落(おち)ゐ。

一時(いちじ)。彼(かの)狩野(かの)ハ。一目(ヒトメ)見(み)るより。京兆(ケイテウ)へ落(おち)ゐ。

ゑ。京兆(ケイテウ)ハ。余(よ)を招(まね)き。用利(ベンリ)考(かんがへ)ありて。狩野探幽(かのうたんいう)が件(モト)へ落(おち)ゐ。

あんとて。京兆(ケイテウ)ハ。余(よ)を招(まね)き。用利(ベンリ)考(かんがへ)ありて。狩野探幽(かのうたんいう)が件(モト)へ落(おち)ゐ。

その。其(その)ものが取扱(とりモチ)てゐ。

法(ほう)なく。高(ウン)下(シタ)なく。義(ヨサ)理(リ)なく。

されバ。即(スナハ)ち余(よ)ハ。一條(いちでう)の京兆(ケイテウ)ハ。余(よ)を招(まね)き。用利(ベンリ)考(かんがへ)ありて。狩野探幽(かのうたんいう)が件(モト

Bayerische
Staatsbibliothek
München

茶牕閒話 上二

○明暦三丁酉三月江戸大火（クワジ）の時紙師狩野探逃（イウ）ゞ
祝着（シウヂヤク）せん（タナ）ぐらより取出（トリイダ）す書物を風（コロヒ）に吹（フカ）せ
大事（ダイジ）なる書入（カキイレ）を見（ミ）ず知（シ）らず取（トリ）
棄（ステ）ゝ行（ユク）ものあり。其者（ソノモノ）や
がて死（シ）ぬ。
○桶（タナ）倉（クラ）より大（オホ）なる側（ソバ）を家（ケ）人（ニン）を頼（タノ）み
家（ケ）内（ナイ）へ取入（トリイレ）ける。
○箱（ハコ）なども同（オナ）じ事（コト）なり。
○肺（キヤク）の通（トホ）る合（アハ）せ。拾（トロ）ひ取（トリ）
ざまざと。
○柿（サネ）の蔕（ヘタ）を焼（ヤキ）て。煎（セン）じ
用（モチ）ゆ。
○橘（タチバナ）の皮（カハ）を焼（ヤキ）なんと
て。炭（スミ）火（ビ）へ入（イレ）ぬ。
○杉（スギ）の葉（ハ）を出（イダ）しんもはか
なきものの実（ミ）とぞ。
○侯（カウ）家（ケ）の大火（タイクワ）。
○後（ゴ）日（ニチ）の法（ホフ）

S. jap. F 397 (2

Bayerische
Staatsbibliothek
München

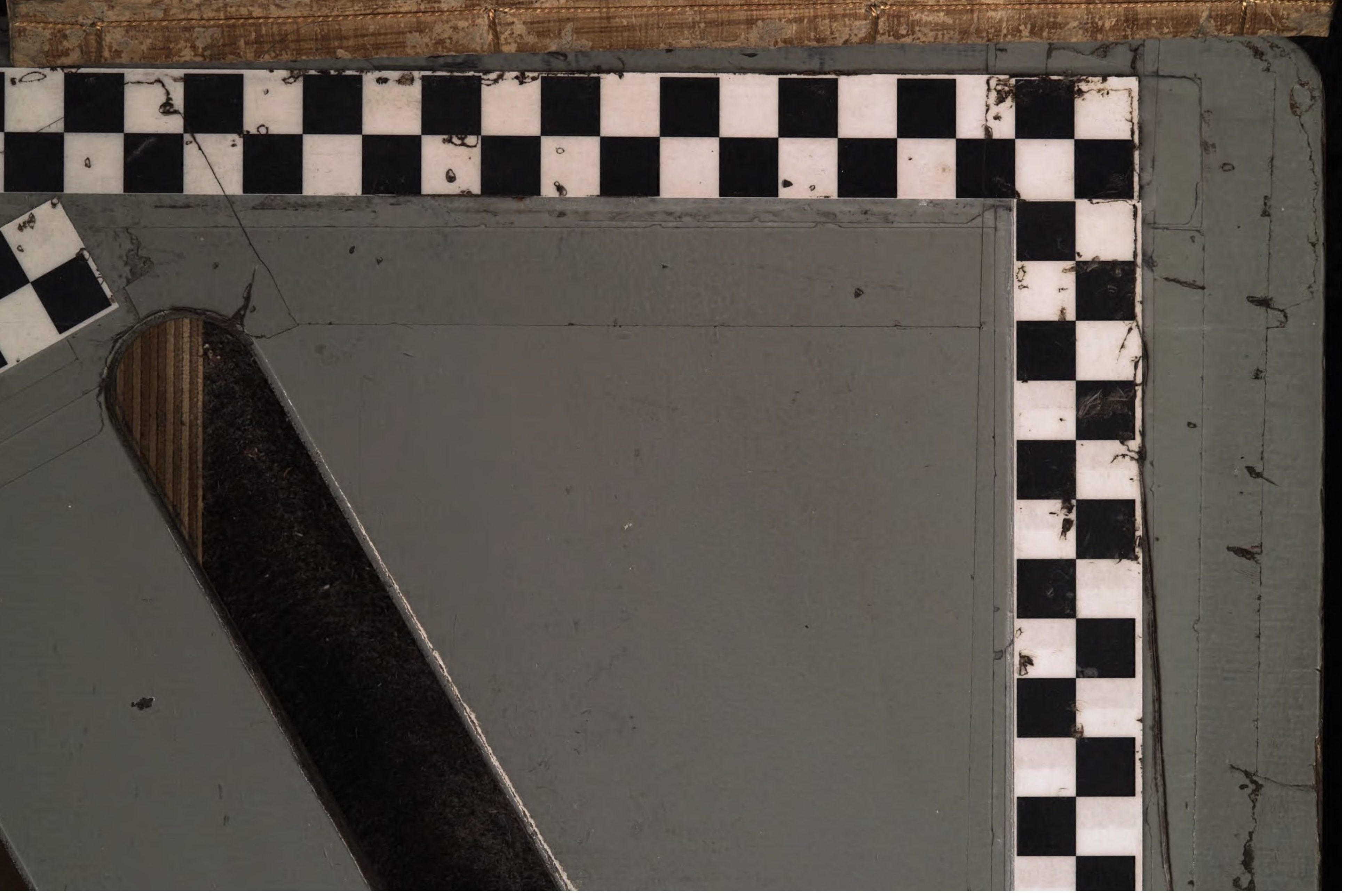
○明暦三丁酉三月、江戸大火事（クワジ）の時、結城侍狩野探逃（イウ）げ
被（カブ）たるに、棚（タナ）倉（クラ）より、葛（クズ）井（ヰ）文（ブン）
次（ジ）家（ケ）人（ニン）ども、ほか
大事（ダイジ）と、取（トリ）出（イダ）し、其（ソ）後（ノチ）、
家（イヘ）入（イリ）を、こん（コロ）ぢ、初（ハジ）め、
棚（タナ）倉（クラ）より、出（イダ）し、
出（デ）でよといひしを、
肯（ガヘ）なはず、
脇（キヤク）の
ざるまゝ
肥（トホ）の通（カヨ）ふ
なのもの
て、
なぢの
杉（スギ）
大
侯（カウ）
家（イヘ）
の
御
祭（マツリ）

S. Jap. F 397 (2

Bayerische
Staatsbibliothek
München

○明暦三丁酉三月、江戸大火事（クワジ）の時、結城狩野探逃（イウ）げ
被（カブ）れ申候。棚（タナ）倉（クラ）より薬入（クスリイレ）を、御（ゴ）ん取（トリ）に入（イ）り申候。其者（ソノモノ）や
大事（ダイジ）と思（オモ）ひ、棚（タナ）倉（クラ）より薬入（クスリイレ）を出（イダ）して、手（テ）に持（モ）ち居（ヰ）申候。
薬入（クスリイレ）ハ、おこ（ハコ）なども、側（ソバ）より取（トリ）出（イダ）すやうに、下（クダ）より取（トリ）出（イダ）し
肺（キヤク）のやうに、通（トホ）り合（アヒ）申候。拾（トロ）ひ取（トリ）、箱（ハコ）袋（フクロ）の様（サマ）なる物（モノ）
さまざまよく、よきと施（ホドコ）なんと、市（シ）中へ打（ウチ）帰（カヘ）て、通夜（トホヨ）
仏（ホトケ）のやうに、橋（ハシ）を作（ツク）り、合（アハ）せ、拾（トロ）ひ取（トリ）、箱（ハコ）袋（フクロ）の様（サマ）なる物（モノ）
て、皆（ミナ）へ売（ウリ）申候。是（コレ）ハ、ふと思（オモ）ひ付（ツキ）申候。
なぐの杉（スギ）を出（イダ）しなんも、はやり（カラ）ぬ。後日（ゴニチ）に、市（シ）
なぐがらす（コシ）。後（ノチ）の大火（タイクワ）なり。侯（カウ）
つ（ツ）

S. Jap. F 397 (2



Bayerische
Staatsbibliothek
München

兎ふと肩衣(カタギヌ)ばかり着(キ)て、袴巾(ハカマキレ)おしぬぐひ、
さくなる事なども
○秀吉公、或時大いなる金(コガネ)の鉢(ハチ)に、水を入れ、
さして、利休(リキウ)に
もたせ、御庭(オニハ)より直(ジカ)に、御座敷(オザシキ)へ
上(アガ)りしが、うつばり、利休(リキウ)が
頭(カシラ)に、ぶつかりければ、利休(リキウ)
仰(オホ)せあらるゝは

除も都合よく受合をやくそくの事。ぶたさるゝ事なく。ぬけさくいう。但し今の当ハ。うそのおれんまでも。守ぬ事でハ。うそつきとなるゆへ。

○宗旨旦那のある人の家へ。ゆきたるに。その家の娘。顔病多くして。むといひたるが。あのまゝにしておきたらバ。いかゞあらんと。

○都て掃除の節。塵芥を。一所に集めて。置ざるやうに。すべし。

○掃除の節。塵芥を。一所に集めて。置ざるやうに。すべし。

○都て

○紅爐(ヒバチ)の頃まで炭(スミ)を拔(ヌ)き炭斗(スミトリ)を入(イ)れ炭(スミ)をつぎ炭(スミ)をつぎ炭(スミ)をつぎ

なるべくお持(モチ)て。炭をおこし。おきてより。炭を
かき。あいさつまでハとまるよふなら。釜を
もぐらく
あ。宇治の名水とゝゝそゝ
○織田殿の額長入(ヨリヲカ)の
く(テンカ)
丸山へ閑(シヅカ)居(キョ)あるよし。注(サン)
不(つ)審(ゝ)なれどもあるが故(ゆへ)
也(ナリ)一軸。今ハ丸山の除(ノゾ)ける
許(モト)なれもと

○白粉（オシロイ）ハ。利休ともうして。今も用ふ。休ハ秘（ヒソ）かを。

○紅（ベニ）ハ。三宅（ミヤケ）大椿（タイチン）也。紅をかうして。宗旦ごのこれもあり。と云。

○歯黒（ハグロ）ハ。大ぶくなり。

○紙入ハ。一尺四方なるべし。

○紙ハ。一尺四寸。四方より切（キリ）そろへて。紙縒（コヨリ）にて。

○三ツ重（ガサネ）ハ。今ハ専ら用ゐる。

○懐石ハ。利休同前にて。後世風流家多くハ。

○煮物（モノ）ハ。茶湯より移（ウツ）りて。

○酒ハ。一種（イツシユ）出して。ふるまひよきぞ。

○飯（メシ）ハ。井水（イミヅ）を。

○肴（サカナ）ハ。三ツ肴（カツテ）へ入ふ。そを。

○組（クミ）ハ。利休秘（ヒソ）上（カミ）

いて
正盛ハ茶筅ヲモ
あらさるのみならず。おのれ
逆臣のこいつるハ武臣
つゝまれハ茶臭ハ出ぬ
○嵯峨天皇弘仁年
ひこ。日光上人の山院
暮雲間とあるハ、本邦
てゝ。そ製を

凡道具屋の隅に、掃除をの七。金をうけ
二つよ、なるまで占ひをして貰ひて
○細川三斎公の家老に付れしとて
專ら（モハラ）家を守り城内の事を執多（トリタ）捌（サバ）きしが
ある時、内田正雪、家をぬすまんと
ねらひ、しのびこみしを、是を
知りて、やがて正雪が
宿（ヤド）へ行き、
先（チサキ）だちて
出（イデ）ぬれば、
跡（アト）より
出（イデ）ぬ。
正雪ハ
両刀（リョウトウ）
なまくら
にて
不興
よく
思ひ
て
あたく
御（ゴ）

へ石よりて侵(アタヒ)をとゝめ
壺と梅とを折てそなへ
○利休が茶の湯を学ぶ
と云ことを聞ていとゞ
○宗旦が茶の湯を学ぶ
せられしとぞ今も大方かくの
○風炉の小板(コイタ)はその
町よ。葭(キ)
来遊(オウヨウ)雲の
ちかへ
○茶の湯の三次にて茶
よ。方なる大平(ヒラカ)
去て。ニワ

比仇亡。時ヨ應(オウ)して、よろこさと、休はも稱美(ショウビ)せ
もほめて、それ彼等を、ほめ、彼うろ
をかうて、それ彼等を、ほめ、彼うろ
○又徐福(ジョフク)大船ヨ乘(トウ)込ヨ仕ヨ出ヨ、
へわろう。真壷(ツボ)ヨ五十取て、唐(タウ)
田行うて、ヨ壷ヨ取次ヨて、唐(タウ)
之疋ヨ献し、右の壷ヨも上(ヒイ)
品ヨ分ヨ、ち、偖(アタ)ヨ、奥(オク)
ヨ、ゐ、ヨ、ヨ、ヨ

Bayerische
Staatsbibliothek
München

兎(メニ)も
さ
○秀吉公(ヒデヨシコウ)武州(ブシウ)大(オホ)いなる事(コト)なるに
さるを(ヲ)
て
しるに(ニ)
ばう
さるとこと入て枝(エダ)を折(ヲリ)て
こうして
なほを(ヲ)

肩衣(カタギヌ)もぐ
裃(カミシモ)
ぬぐ
さく
ふる事(コト)なるに
ふまつまと
仰(オセ)あらるゝ
梅(ウメ)の枝(エダ)を
家(ヤ)
水(ミヅ)の面(オモ)
事(コト)
用(モチ)
ぬ

金(コガネ)の絆(ハナ)
梅(ウメ)一枝(エダ)おさ
倒(カタブケ)
利休(リキウ)
水(ミヅ)へ
入(イル)
一升(イツシヤウ)
の
色(イロ)
映(ハエ)
あ
よ

中(ナカ)
折(ヲリ)
裃(カミシモ)
脱(ヌギ)
ぐ
ぬぐ
ぐ
ぐ

陳ル（ナラ）事なし。其（ソノ）咄（ハナシ）をやく事（ゴト）ゆゑ。
いつ。但（タヾ）一度（イチド）今（イマ）の咄（ハナシ）ハ。
覚（オボ）ゆ。イサギヨ咄（ハナシ）さへ夢（ユメ）をサトさぬ
○宗旦（ソウタン）のかれこまぜも。字（キ）、
いひ法（ホウ）旦（タン）或日（アルヒ）あるを指（サ）
へといひ法（ホウ）ゞ。あるを文（フミ）
○柿（カキ）ノ蔕（ヘタ）
ます〳〵いひ〳〵なり
彼（カノ）まゝ

茶曲話上

○紅爐の頃まで炭をそまて（ニクク）火を入てをくよし。利休うそふきしは。炭くそをそつかすくそよろしからず。炭よ甫主（ハヤ）皮のふくなるほどに焼（ヤキ）をくけそ也。おおの炭よ用ひ

○織（オク）田（ウラク）宗甫時代と云しそなるへし。

この茶の湯ありと云ふ。不思議なる事ありそ（キヨ）はそ庵あて。はそ（キヨ）の下（ロ）そ後（ロ）ろ。

○はそ（キヨ）の下まて。掃（ハキ）ほそめ。客（カツ）て掃除（チ）乃

なるゆゑ
お出(モチ)て
かきものを
もぐく
あ。こゝ
○織田
く
丸山へ
不二(フチ)
此一軸
ら
此

○白粉（オシロイ）ときは。利休ねずみ。

紫苑（サウ）ときは。三宅（ミヤケ）大精（タイセ）。紅梅をかさねて。宗旦ごのみ。

うぐひすときは。

○紅訪（ベニおとし）ときは。

○三斎（サンサイ）利休同意にて。侘（ワビ）座敷（ざしき）ごのみ。

○茶湯（ちやのゆ）ときは。一尺四方なるべし。

おまく（ヒロ）ときは。一尺四寸。四方なるべし。

○給（キヌ）ときは。一尺四寸。四方なるべし。

○袋（ふくろ）ときは。

○帛紗（ふくさ）ときは。

○仕覆（シフク）ときは。

○帛紗（ふくさ）ときは。

○袋（ふくろ）ときは。

○給（キヌ）ときは。

○茶湯（ちやのゆ）ときは。

○三斎（サンサイ）利休同意にて。侘（ワビ）座敷（ざしき）ごのみ。

○三斎（サンサイ）利休同意にて。侘（ワビ）座敷（ざしき）ごのみ。

○茶湯（ちやのゆ）ときは。

○給（キヌ）ときは。

○袋（ふくろ）ときは。

○帛紗（ふくさ）ときは。

○仕覆（シフク）ときは。

○帛紗（ふくさ）ときは。

○袋（ふくろ）ときは。

○給（キヌ）ときは。

○茶湯（ちやのゆ）ときは

いてゝ
正盛ハ家ニ入ゝもゝセ給ハ
あゝさるものゝ有ぞかし。おゝうて武士の家
面目なくこそ
つゝまれバ茶具ハ出さゝ
○嵯峨天皇(サガテンワウ)弘仁(コウニン)年ま
う。日光(ニチクワウ)上人の山院ゟ
彦公(ヒコキミ)
暮雲
てゝ
梅屋(トガノヲ)
ゝるうちゝて

て道具屋の隅（スミ）に積（ツミ）よく風情（フゼイ）の七。金（キン）をうけ。
奥（オク）なる二つよ。占（シメ）了（タ）を。評（ヒヤウ）判大（ハンオホ）うに。
〇細（コマ）川三斎（ホソカハサンサイ）公（コウ）おの系（ケイ）図（ヅ）を比（クラ）べ多（オホ）抱（モタ）もしく
專（モハラ）なるが。成（ナ）丈（タケ）守（マモ）堀田正（ホツタマサ）盛（モリ）家（イヘ）をぬきん
そ。出（イ）来（デ）秘（ヒ）蔵（ザウ）の品（シナ）多（オホ）きを。自（ミヅカ）ら誇（ホコ）りゆ。行（ユク）うを
奇（キ）なるに。やゝ正（マサ）しく。
寧（ムシロ）は。死（シヌ）ありてほ。いと。あはれ。
そぐ。其（ソノ）品（シナ）を救（スク）ひ。新（アラタ）に出（イデ）んを。
もそ。其（ソノ）品（シナ）ハ。両（リヤウ）なきまでに。
て。武具（ブグ）なるそれハ。正（マサ）盛（モリ）家（イヘ）
かゝるも。あたく御（ゴ）てか。

へ石上(アタ)て。侯(アタ)をすゝめ。

壷と梅と。

○利休公。茶ハ。手前をかしこまりて。

と云事。

○宗旦公。茶ハ。客ぶりにて。

せよ。と。今も大方かくの事なん。

○風炉(フロ)の小板(コイタ)ハ。そのまゝにハ。

町よ。萩(キ)の。

来遊(オウリウ)雲の。

すゝめよ。遊(ユウ)客の。

○茶道功(コウ)者の。侘(ワビ)たる。

よ。方なる。大平(トラカハラ)。

○武(アルヒ)年の風炉(フロ)。

比仇(ヒイキ)と。時(トキ)と。應(オウ)して。よろ
もをかうて。をいへ。房事(ボウジ)をほ
しいまゝにして大(タイ)病(ビヤウ)よ。起(オ)こさと。東洋(トウヤウ)
の仕(シ)業(ワザ)といひ。又(マタ)は。泉界(センカイ)
へわたる。町人。納屋助(ナヤスケ)ん。未(ミ)つなる
田行(タユク)。うつ。真壺(マツボ)五十取(トリ)てこう。羽(ハ)
二(ニ)年(ネン)七月廿日。所の代官石
を。唐(タウ)櫃(ビツ)の傘(カサ)。嫁娘(ヨメジヨ)十挺(テウ)。生(イキ)
ながら。奥(オク)書院の次間より。
品(シナ)をうけ。右の壺(ツボ)と上(アタ)に
献(ケン)し。右の壺(ツボ)と上受(アタウ)よ入(イ)
去(サ)て。三(ミ)つ指(ユビ)を。曲(マゲ)
もどすと。又(マタ)。三(ミ)つ指(ユビ)を。曲(マゲ)
おろさんとする。ト上

○もの
そて主
らまそ
○亭
利休の
弓田歌
亭陳一
或吋秀
そて各

なども用ひ。夜おう古戸乃名ある茶又ハ焼（ヤキ）国（クニ）焼（ヤキ）などの茶碗を取合（トリアハ）せるのも面白（オモシロ）し。仕（シ）あまりよろがちに多（オホ）し。又いつも同（オナ）じ。取合（トリアハ）せもよく無（ナ）きの様（ヤウ）変（ヘン）にて肝要（カンヨウ）あなれども

○利休（リキウ）道具（ダウグ）ハ。栗（クリ）より柄杓（ヒシャク）まで。

○侘（ワビ）ハ。貧（ヒン）なるにハあらず。仕（シ）あまりよろがちに多（オホ）し。又いつも同（オナ）じ。取合（トリアハ）せもよく無（ナ）きの様（ヤウ）変（ヘン）にて肝要（カンヨウ）あなれども

○利休（リキウ）道具（ダウグ）ハ。栗（クリ）より柄杓（ヒシャク）まで。

○侘（ワビ）ハ。貧（ヒン）なるにハあらず。仕（シ）あまりよろがちに多（オホ）し。又いつも同（オナ）じ。取合（トリアハ）せもよく無（ナ）きの様（ヤウ）変（ヘン）にて肝要（カンヨウ）あなれども

○利休（リキウ）道具（ダウグ）ハ。栗（クリ）より柄杓（ヒシャク）まで。

○侘（ワビ）ハ。貧（ヒン）なるにハあらず。仕（シ）あまりよろがちに多（オホ）し。又いつも同（オナ）じ。取合（トリアハ）せもよく無（ナ）きの様（ヤウ）変（ヘン）にて肝要（カンヨウ）あなれども

○利休（リキウ）道具（ダウグ）ハ。栗（クリ）より柄杓（ヒシャク）まで。

の名を賞翫（シャウクワン）さゝんとて。路次（ロジ）の花あり木（き）ぎ
よう。今（いま）はなべてうつろひまとなりぬ
○金十（カナヒ）森宗和（モリソウワ）が原（ハラ）は十（ヒ）
肝要（カンエウ）なり。さゝくバ向（ムカ）ふ未造（キヅク）りの結構（ケッコウ）なる
柄（カヘ）なども植込（ウエコミ）みよ。茶屋（チヤヤ）の数寄（スキ）のみ
奥原（オクハラ）ふかく寂（サビ）て。おもしろくゐん居（イ）なり。因舎（イナカ）
かりの家（イヘ）ちの茅屋（クラヤ）など。こしらへ。ゆかしき
もの。二階（カイヅヾ）作（ツク）りの茶屋（チヤヤ）。草屋（ワラヤ）など。
なつかしく。おくゆかしき旅（タビ）ぼよう。
も掛物（カケモノ）ハ名僧（メイソウ）の墨蹟（ボクセキ）。
なきのよし。頼（タノ）べ
ハ。今（いま）

烏丸(カラスマ)
(ノコ)
○小北(キタ)向(ムキ)面(ダウ)の座敷(チン)の小庭(ニワ)まで西(ニシ)日(ビ)のいるぐらゐ入(イ)てあるなん
朝(アサ)ぐらゐ来(コ)ぬ
赤小袖(ソウ)
○紹鷗(ゼウオウ)の歌の利休へ次(ジ)の事をしくじりて
生(トクレン)ずとあれ秋の夜(ヨ)ながのうそ
死(キク)なんをきゝ給(タマ)ふべし小坂をしてる
死(シカズ)一生(ショウ)
○本邦(ホン)邦(ホウ)に在(アリ)てよをはゞかる人(ヒト)の

所持（ショヂ）なりしものゝ
○僧南浦（ナンポ）嘉元三年の秋。後伏見上皇へめされまゐりて。淀の
時南浦茶を献（ケン）ぜられしに。上皇（ジヤウクワウ）御感（ギヨカン）ありて。召（メシ）上られし。あまつさへ
よ。賜（タマハ）るとて。このバ。南浦悦中（エツチウ）の悦紗（エツサ）を出して。頂戴（チヤウダイ）ありし。是茶
の始（ハジメ）なるべし
○幅（フク）紗（サ）を製（セイ）して。京都の
先（セン）ハ。宋朝（ソウテウ）のものにて。林間（リンカン）屏山（ビヤウザン）建仁寺（ケンニンジ）第二世龍山（リウザン）徳（トク）
いて了。建仁寺（ケンニンジ）第二世龍山（リウザン）徳（トク）風を稱揚（セウヤウ）せし。南都（ナント）より後（ノチ）
ひ来（キタ）りて。堪（タヘ）

○自仙(コ)なくして男(ヲヒ)なく
もる漏(ヌリ)しづ。ノチ不勝(フカツテ)
の町人冬来(フユキ)といひ
も不時よりぞ冷ゆる
ず。今朝(ウ)料金百枚ハ
づゝやといひよ。冬本大
ぶ〳〵ハ百両をた百ありけ
○万(モ)代(ヅ)と書(カキ)

徳助といつそを
家財(カザイ)と
成人(アルヒト)の
て囲珠寺をゝやまつ
自仙(アト)
百両と書(カキ)
たつそを
ひくまよ。
それで
なり。元(モト)の
屋敷(ヤシキ)ハ百両ある
織(オリ)物(モノ)ハ
楽(ラク)の

ひ、こ井寺の鐘れもづく（スキヤヅク）
り筒ま園城寺ヲ庵（セウアン）とぱ
とゑてあり、後金ヲ宗旨（ソウテイ）の
八百ありなもゑて、或（オホ）
び帰（カヘ）るとて、自仏へいまゑ
まて、女そのぼまよ、園城寺ヲ
ハそでめて出ゑんとゐ
京あうしよ、彼園城寺ヲ
しごゑあうえゆゑふよ、
の弁ま
ぼ（ハゞカリ）しまし、京
の人稍（ヨウ）ビ笑セ

ラン・ゼ（ヤウジ）寺と名ぜ寺、
園城寺ヲ（セウアン）庵と名ぜ寺、
金ヲ（キンフン）於ま
の奈（エ）良ジセ（バラジセン）自仏
ムラ
村宗二、
オホ
ゑて、未ゑ
ぼの日切乃氏
ぬぐの来年
ようよ、又上
からゑ残立
ゑ園城寺

て、人ハを截(キリ)て上(カミ)へ、そ
ゝまあ
吋(カ)ゝ思(オモ)ふのあるゝ、お破(ウチワリ)
うゝうあつゝおを、後(アト)つぎ合(アハ)せ秘(ヒ)ゝ
佐吉(サキチ)ハ、一(イツ)ぱい喰(クハ)ふ、而(シカ)もそ
ゝ
○ゝて、ゝ
て、ゝぐゝ
ぬまゝゝ

奈良鍛冶（ナラカヂ）

つくるの、作をそ。奈良の鍛冶の縁なくして、トクゲンや

思ありとうそ。作をそ。ゴトクの墓置（オキ）文ふるなん

○短薬（タンヤク）

やさもつてしるなん

○秀吉小田原（ヒデヨシヲダハラ）陣のとき、利休（リキウ）並山（ナミヤマ）竹の、そぐまゝにてこんろ

なりとて、利休も截（キリ）あるをつくろはさる。能（ヨク）なんと、秀吉

たあらバ截まゝあるをつくろはさる。能なんと、秀吉

どさよくも来（キ）たり。なのか。その儀（ギヨウ）

さんじ、放（ナゲ）捨てもれて有。用（フヨウ）ゐず

大禁(キン)を犯(カ)せし罪人(ツミビト)を釜煎(カマイリ)にせしより、茶(チ)の湯(ユ)の釜をぬす人(ビト)などの釜(カマ)をぬすまぬゆゑ、今(イマ)は学(ガク)の鍋釜(ナベカマ)を縛(シバ)りてぬすむ。

○天明(テンミヤウ)釜(カマ)は上野(ウヘノ)國佐野(サノ)の天明(テンミヤウ)の釜師(カマシ)にて、彼(カ)の地(チ)にて鋳(イ)たるゆゑ天明(テンミヤウ)釜(カマ)と書(カ)きぬ。学(ガク)は関東釜(カントウガマ)ともいふ。ふるき釜(カマ)の名(ナ)あり。

○利休時代(リキウジダイ)は京師(ケイシ)に住居(ジウキヨ)せる与次郎(ヨジラウ)なども名人(メイジン)なり。孫今(マゴイマ)は相続(サウゾク)せずそ。こまもを京釜(キヤウガマ)といふ。利休(リキウ)の釜(カマ)とて縫(ヌ)ひ縁(フチ)ある多(オホ)くまなり。

○乙御前(オトゴゼ)ふくん尻張(シリバリ)なども利休時代(リキウジダイ)の名(ナ)ある乃釜(ノカマ)こ。

せんとて。前の形(カタチ)とれんとすべあらんも。一ぶ(ブ)もたがわ(タガ)ず。其外は稍美(レウビ)ありて即ち。
○筆(アヒ)を取(トル)ひめ。但し糸具(ナヤグ)よく。利休形(ガタ)とうたものなれば。ユヱ有なるべし
て用(ユ)ありやまて八なし。筑前(チクゼンノクニ)國乃芦屋(ヤシヤ)釜(ガマ)ハ。松(マツ)ハ國のあれ下絵(エ)をかゝせ。雪舟(セツシウ)の時(イ)釜なり。雪舟の里を遊(アソ)りあるとし。最上(サイジヤウ)とす。雪舟ハ石見國(イハミノクニ)に
の人なり。一説(セツ)に大内家(オホチケ)に居(キヨ)て。冶工(ヤキヨウ)をよび。雪舟をもてなしゆえ。
なるべし。一説に大内家を威勢(サカン)をかゝやかさんとて。
かゝせ給(タマ)ふ。其(ソ)ハ杉梅(スギウメ)の数(カズ)なり。杉ハ孫(マゴ)の代(ヨ)

先女ハうめぞさくて、紅梅(クレナヰ)もあるまじきもてなし
も。あるまじきもてなし
○利休ハ、感じて、この弥(ヤ)がめづらしく
試(コヽロ)ふるもちつぞてえもそしまく(ナガ)ぶる
○今の学は、此陣泥(アヅリ)の死(シタヒ)ハ。大(オホ)きに昔(ムカシ)とハかをやう
候やうハ。兵形(ヘイケイ)おぼえて、そのまゝ利休ト上る
よハよふて、又もよふ作(オホセ)あり利休ハ
葵(ホヽ)あるまゝ紙形(カミカタ)を切(ザ)て、そのまゝ上ぐよ。其
ほかの紙形を切(キ)りて上ぐると。切(デ)

点(テン)ずるに、やゝ久しく水(ミヅ)を茶(サ)を茶筅(タウ)にて立(タテ)ず、茶をおし入(イレ)ても、十ホ
茶さばあの大茶入(チヤイレ)より、茶をなよくと
よき程(ほど)に点(テン)ずるこそ、ユヽロミ味(アヂ)わゝるゝ
十ヘ
ものなれ。
○利休(リウキウ)曰(いはく)、茶入(チヤイレ)の袋(フクロ)ハ一(ヒト)重(ヘ)なるべし。二(フタ)重(ヘ)ハ悪(ニク)し。
○利休(リウキウ)曰(いはく)、茶入(チヤイレ)の袋(フクロ)ハ一重(ヒトヘ)なるべし。二重(フタ

伊予なる人あげく切さげて切と何て捨(スタ)ても
なく、むくつかふ事あるもの
とて茶人多く
○慈照院(ジセウインデン)殿義政公茗(チャノユ)湯をぬまもなく、真(シン)行(ギョウ)を昨
となく改(アラタ)め、はた茶会(レキ)の式(シキ)代(ダイ)り、挿(モ)花(ヤウ)掃(ハラ)除(ソウジ)等(ラ)迄小壁(コカベ)より自(ジ)ら筆(フデ)を執(ト)り給ひ、山水(サンスイ)人物(ジンブツ)花鳥(クワテウ)の絵(エ)も自(ジ)畫(グワ)讃(サン)の文字(モジ)も自(ジ)ら書(カ)き給ひ、其(ソ)外(ノホカ)諸道具(シヨダウグ)迄(マデ)も自(ジ)ら好(コノ)み給ひ、其(ソ)の外(

尾藩　近松茂矩輯

むし

合せて炙(ヤキ)を切(キリ)て點(タテ)し・猪(シヽ)の肉(ミ)も能(よく)煮(ニ)て炙を切と・さばく切(キル)と・通(トヲ)るを通(ダヾ)すと・其(ソノ)三ツなり・もつふう武(タケ)ノ家(ヤ)に紹鷗(ゼウオウ)ご四条(デウ)おなじ・

てキルと・さばく切(キル)と・通(トヲ)るを通(ダヾ)すと・其(ソノ)三ツなり・もつふう武(タケ)ノ家(ヤ)に紹鷗(ゼウオウ)ご四条(デウ)おなじ・

炙(ヤキ)を切(キリ)て點(タテ)し・猪(シヽ)の肉(ミ)も能(よく)煮(ニ)て炙を切と・さばく切(キル)と・通(トヲ)るを通(ダヾ)すと・其(ソノ)三ツなり・もつふう武(タケ)ノ家(ヤ)に紹鷗(ゼウオウ)ご四条(デウ)おなじ・

合せて炙(ヤキ)を切(キリ)て點(タテ)し・猪(シヽ)の肉(ミ)も能(よく)煮(ニ)て炙を切と・さばく切(キル)と・通(トヲ)るを通(ダヾ)すと・其(ソノ)三ツなり・もつふう武(タケ)ノ家(ヤ)に紹鷗(ゼウオウ)ご四条(デウ)おなじ・

むし

尾藩　近松茂矩輯

むし

合せて炙(ヤキ)を切(キリ)て點(タテ)し・猪(シヽ)の肉(ミ)も能(よく)煮(ニ)て炙を切と・さばく切(キル)と・通(トヲ)るを通(ダヾ)すと・其(ソノ)三ツなり・もつふう武(タケ)ノ家(ヤ)に紹鷗(ゼウオウ)ご四条(デウ)おなじ・

尾藩　近松茂矩輯

むし

合せて炙(ヤキ)を切(キリ)て點(タテ)し・猪(シヽ)の肉(ミ)も能(よく)煮(ニ)て炙を切と・さばく切(キル)と・通(トヲ)るを通(ダヾ)すと・其(ソノ)三ツなり・もつふう武(タケ)ノ家(ヤ)に紹鷗(ゼウオウ)ご四条(デウ)おなじ・

尾藩　近松茂矩輯

むし

合せて炙(ヤキ)を切(キリ)て點(タテ)し・猪(シヽ)の肉(ミ)も能(よく)煮(ニ)て炙を切と・さばく切(キル)と・通(トヲ)るを通(ダヾ)すと・其(ソノ)三ツなり・もつふう武(タケ)ノ家(ヤ)に紹鷗(ゼウオウ)ご四条(デウ)おなじ・

享和癸亥秋七位下木村安藝守藤原朝臣俊篤撰

目次

心ヲ言ヲ一
乎書成テ二
冠其首二
焉予序ヲ二
屢ク人ヲシテ二
鄙ノ

興復惟日不足而會不
攸關之興不非茶道之
也嚴親結交成儀至于
其勤豈啻格鄙乎喜口舌
之是寡同和後尊厚重禮讓
實也慰嘉其約維絲

使談其曰予逸民擧茶道有徳
雅域君子不加之以画圖成三
君子為也近松君卷之
之氏上雅子名君
不擧

Bayerische
Staatsbibliothek
München

一日不見

茶其何也近之窻閒話序
故事ヲ上ニ王公一下ノ主客之歡復深哉松氏有此舉則輯メ二
以テ慰ニ嘉賓ヲ之ニ嘉賓ヲ慰ムル乎投レ轄ヲ興ヲ
之ニ茶尾ヲ以テ慰ニ道藩ヲ心ヲ至ニ心ヲ一ヲ

L. Jap. F 397 (1

閑窓煎茶話

BSB Bayerische StaatsBibliothek
MDZ Münchener DigitalisierungsZentrum Digitale Bibliothek

Chikamatsu Shigenori

Chasō kanwa

Kyōto Kyōwa 4 [1804]
L.jap. F 397,1-3
urn:nbn:de:bvb:12-bsb11166380-5